

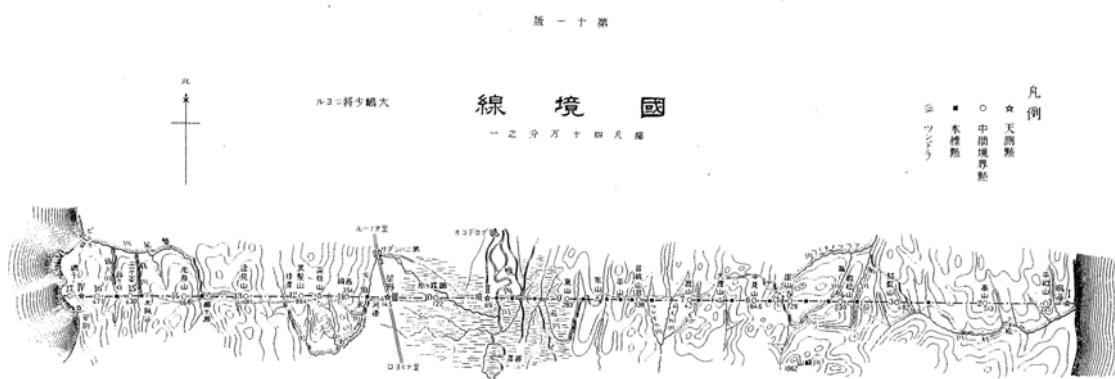
* 日露戦争後の樺太北緯 50 度以南劃定委員長の講演記録

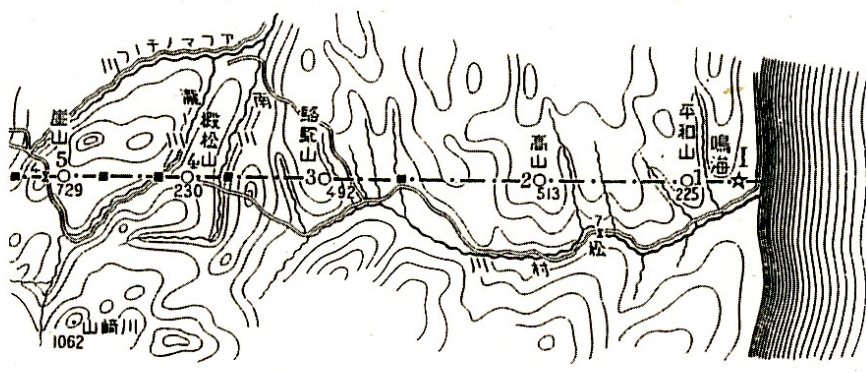
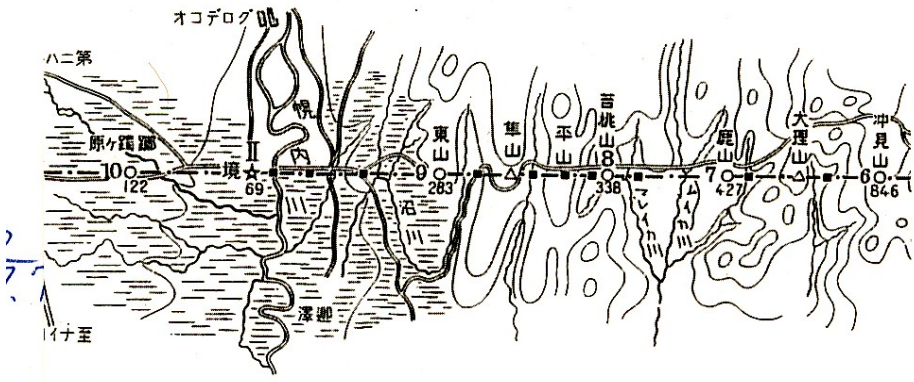
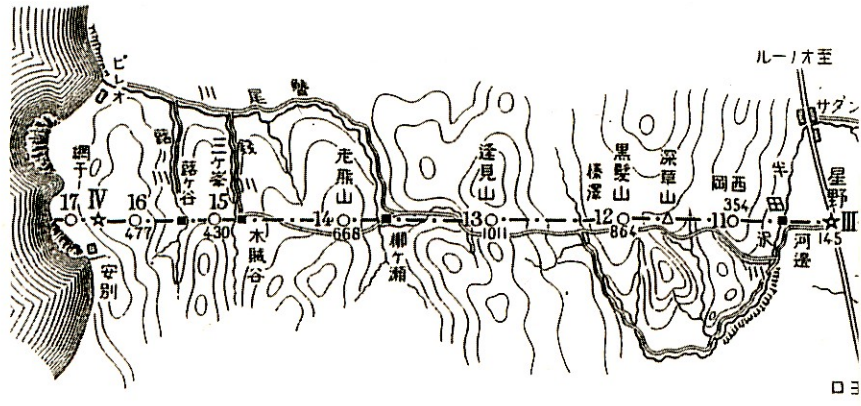
アーカイブ室新聞第 108 号、第 130 号に日露戦争に勝利し、樺太の北緯 50 度線以南を劃定されたことに関する記事を書いた。この劃定のための北緯 50 度線の国境制定のために東京天文台から平山清次、田代庄三郎という天文学者が派遣された。この樺太 50 度線の国境制定のことについては陸軍省が明治 43 年 6 月 12 日、樺太境界劃定委員編纂として発行した「樺太境界劃定事蹟」という詳細な報告書がある。これについてはアーカイブ室新聞 108 号でふれた。

今回は、この報告書が発行される 2 年前、明治 41 年 9 月 15 日、東京地学協会発行の「樺太地誌」という書物の第 3 章に「樺太境界劃定」という記事があると、国立科学博物館の洞口俊博氏から同館に出入りしている中島隆という人からの情報として、そのコピーをいただいた。この記事はその樺太境界劃定委員長であった陸軍少将大島健一氏の講演の要旨である。この北緯 50 度線の国境を定めるために東京天文台から天文学者が動員された事情、その天測等の事情について当事者として語っておられる。この記事の前文にあるように、このことについて話す最適の人の講演であったと思われるので、そのあたりの事情の記録としてアーカイブしておきたいと、その全文を引用した。以下、同書の第 3 章である。

第 3 章 樺太境界劃定

左の一篇は明治 41 年 5 月東京地学協会に於て境界劃定委員長陸軍少将大島健一氏の講演せられたる講話の大要なり同事業を知るに最も適當なるものと信じここに掲ぐることとせり。(筆者注：下図は北緯 50 度の境界図である、小さすぎて詳細が分らないので、3 分割し拡大したものを次ページに示す)





第1図 上から西部、中央部、東部

私は樺太の境界劃定に就てお話いたします、此仕事は明治 40 年に了りまして、明治 41 年 5 月上旬劃定に関する圖や書類等も交換をすました仕事は當に終結して居ります、併しポーツマス條約に依りますと、此劃定の際、之に関して作られた所の圖書は多分我政府の承認を受くることでありましよう、どういう形で承認されるか知れませぬが、最早此境界なるものは圖の中心に亘って引いた線の如く、他の一方のものと或一点を定めて引いた線の如く、最早他に引くべき線は今日の學説ではありませんから多分承認されることと思ひます、そういう次第ですから、此處で御話することに付て此事業を管理された内閣の一員たる陸軍大臣に伺ひました所、特別の会でもあるから話しても宜からうということとで今日は罷出ることになりました。

此仕事に著手しましたのは、一昨年即ち明治 39 年であります、私が此劃定委員長の命を受けましたる節、即ち、一昨年春に於て我々の知つて居たる地圖は 80 万分の 1 の地圖で、それは露西亜の圖を獲て、日本のものに直したものでございます、其他何程かの河筋は露国には分つたものがありました、此北緯 50 度線に當る土地の附近の地形を知り得る圖は他にはありませぬ、此島を占領しました節は今日此處に圖其他を持って参つて居ります中島測量手が明治 38 年の戦争當時に此 50 度線を少しく越した點まで中央部の測量を致しました



のみであります。それで自分は任命を受けましても、土地の状態が分かりませぬので如何なる方法を以て如何なる程度でやったら宜からうということを決めるのに材料が乏しく餘程困りました。併しポーツマス條約に依ると、境界は 50 度の線に準じて劃定せよ、已むを得ぬ場合はどちらかに偏倚しても宜しい、併ながらその偏倚は他の部分に於て補ひ他の方面に偏倚して地積の變わらぬように、面積の變わらぬようにと云ふことの注文がしてあ

りました、そこであの附近の地勢を見ますに、80 万分の 1 の圖によりますと、そこで境界にすべき大なる自然の地形を得ることが出来ませぬ、無論この辺は人も住んで居らずする所から、鉾山であるとか一個人の持つて居るものが、両方に分かれることは無く、又港灣の如きものあって其港灣の真中が境界に當って居る様なものも無い、そうすると、殆ど偏倚する必要はないから、大略一直線に境界を造ることが宜かろうと考えまして、それを大體のやり方としました。尤も劃定する程度はどの位まで細かく之をやるか、彼の亜弗利加（アフリカ）地方にも前世紀以来段々欧州強国と分割して取りまして、是等の境界も米英仏独伊等に於て互にやったものが澤山ございます、併し境界の劃定法を書いた書物はありませぬ。御承知の通り境界條約と云うものは澤山出来て居ります、それ等に依て見ると若干は劃定して、未だ細かい劃定がしてない。即ち境界劃定の仕方に精粗の差別がある。そうして開化の程度に依って、人文の發達とか、拓殖の程度に依って必要の起った時に、多少標識を建てるとか、目標を立てるとかやって居らう考られる。

此樺太の白露の境の附近は、古來曾て人跡の至ったことも無し、斧斤の入ったこともなき大山林で、道路も無く住民も無く、而も今後澤山の人が交通することは近き将来にはあるまいと云う考えを定めて、私は実に両海岸に一つ一つ天測を行い、この中央に南北に縦貫した道路が通って居て、平原がありますが、山の所は省いて、それから将来拓殖の進むに従ってやったら宜かろう、其基礎を造って置けば後來簡単に出来るからと云う考えを以て、それに関する劃定の要領を定めて向うに出掛けました。尤もそういう考は、今回の仕事は両国協同しての仕事でありまして、露西亞の者が矢張りそれに同意せんければならぬから、唯こちらの腹案同様にしてそう云うものを持って行って、一昨年向うの委員と會見しました、然るに向うの委員はポーツマスで議定した様に全線を通じてやろうではないかと云うので、段々話を聞いて見ますと、向うの委員は、委員長以下屢々境界劃定の事業に従事して経験のある人が参って居ります、殊に私より四五ヶ月前、即ち戦争が終わると同時に行って越年して、多少山河の形勢も分って居ると云うことで、多分やれるから全線通じてやろうと云う意見でございました、それでこちらの提案通りの方法を以て、山の間をも繋げる方法でやることに極めました。そうして明治 39・40 の 2 カ年間に實際働きましたのが七か月と十幾日と云う日でありました。此地方は 5 月の中旬頃から 6 月の初めに掛けて雪が融けます、其雪融けの為に河川は漲り、丘陵は落ちると云う様なことで、餘程交通が難儀であります、況や其初めに當ってはまだ雪があって、それが寒国に能くあります様に雪が積もって氷になって居る、それ等が道を塞いで居り、山間谿谷にも深く雪が積んで居ると云う都合で、5 月中は手が著けられませぬ、6 月上旬からして著手しましたが、明治 39 年は初めてのことでありますから、念を入れて 7 月から著手する積りでこちらを出て行きまして、7 月から 7、8、9 の三ヶ月やりました。明治 40 年は状況が分かりましたから、5 月から出て仕事を始めて 5、6、7、8 の 4 ヶ月働きました。この地形を見て居ったのは、私よりも向うの委員の方が先でもあり能く見て居る、且つ数多の実見を有って居る者で、此くらいは難儀でも行けると云う見通しを早く付けて居りました、併し劃定方法は幸い日本

に於て研究して行った方法に依って、総て実行することが出来ました。

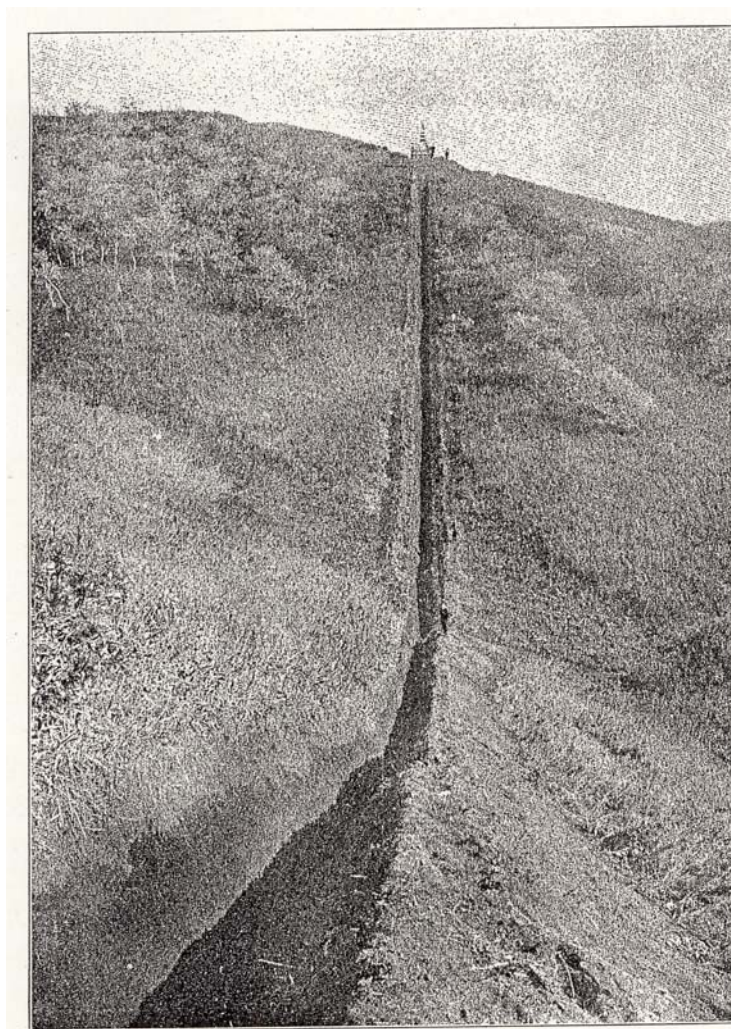
私共は一体商売がサーベルを振廻す方でありますから、斯の如き天文とか地理とか學術に關したことは、一向深い素養を以て居りませぬ、明治 26 年でありましたか 29 年でありましたか、欧羅巴（ヨーロッパ）から戻る時分に今の長岡理学博士と一緒に、船の中で種々數學などの話が出たり、或は天文研究の話などが出たので、偶然のことから地軸の運動と云うことを私が始めて知ったのであります。軍人でないと御耻かしい話であります、それまでは地軸は動かぬもの、静止して居るものと私は思つて居た、諸君も御承知でございましょうが、此通り段々暖かになり、雪が少なくなるが、宋の邵康節が杜鵑の声を聞いて、地氣が南するとか北するとか云つて難じたと云うことを、私共子供の時分に讀んだことがあるが、そう云うことからして何か地球に変化を生じて居りはせぬかと云う様な話をしたら、地軸が動くと言つた話になって、それで初めて聞いた。そこで地軸が動くことは緯度を定めるに基礎が動いて来ると云う話でありましたから愈よ境界劃定をやるに就ては先ず地軸の動くことを能く研究して行かねばならぬ、殊に向うはアフマネチフと云う有名な天文家が委員になって居る、こちらにも誰か有名な人の意見を聞き、有名な人と一緒に行って貰いたいと思つて、私は大学に行つて、長岡博士などの曩の話の地軸・地表面の運動等に就て能く研究した人を連れて行きたい、尚ほ此劃定に就て意見を聞きたいから、中村精男、平山清二、長岡其他天文の事に関係して居る人に一室の寄つて貰つて、此劃定に關する方法に対して意見を求めました、所が別に意見は無いと云うことであります、そこで段々地軸の運動と地表面の始終動いて居ることに就て話を聞きました、それから誰が宜かろうと云うことになって、遂に寺尾天文台長の推薦で天文台に居り且つ帝国大学の助教授である理学士平山清次と云う人が地軸の運動、地表面の事、経緯度の事に就ては始終専門に研究して居つて、其點に於て是は日本のオーソリティーであるから之を連れて行けば宜かろうと云うことであつた、それで平山理学士が私の方の委員になることになりまして、天文の事は一に同氏に任せてやらせました。

それからこの劃定の方法を定めますに付ても、前申上げた通り、今まで種々やつたに關らず、細かい劃定を実行した書類が無い、幸い我が陸地測量部即ち今此處に居られる大久保少尉の所に、亜米利加（アメリカ）の加拿陀（カナダ）と合衆国の境界を定めた書類がありました、それは非常な大部のものでございまして、委員の報告からアストロノミーの細かいことまで書き、且つ境界劃定の経験などを書いてあつて、非常に好い参考書でありますから、俄にそれを反復熟讀して、漸く劃定方法は自分で定めた仕方で宜かろうと安心を得て出掛けることになりました。

それで之を順次に御話しすると大変込入りますから、話の順を変えまして大要を述べたいと思ひます、それには先ず境界が出来た其出来た境界はどんなものであると云うように逆に御話しした方が、簡単で分り易いと思ひますからそう致します。

樺太の東海岸から西海岸に至る 50 度線の幅は 131 キロ餘日本の 33 里餘あります。中央は平原で幌内川が通り又其の西に旧街道が通つて居ります、今は非常に破損して通行に堪

えませぬ。この道の附近と幌内河畔に各一つと西海岸の附近に一つと東海岸に一つと天文測量を行って天測點を定めて、之を境界の基礎と致して、それからその間は測地學の方法でこの點から起ってこちらを測り、この點から起ってこちらを測り、この點から起って向うを測ると云うことを定めたものであります、この天文でやりました四つを天測境界點と名けてある。それからジオデシーで出した其線の上に置いた赤い標が小さい境界點で中間境界點と名けてあります、此中間境界標がこれから起って向うに 17、**重**に山の上に設けてあります、之を山の上に置きましたのは斯う云う理屈があります、人が山の谷を通過して来るのに山の上の高い所に建てたのは此標の間は 33 里を 17 に割ったのであるから凡そ 2 里くらいの平均になって居りまして、近い所もあり遠い所もあって多少取除けがありますが、5キロから 10キロすなわち 1里半弱から 2里半位までの間に一つ一つ是が置いてあります。



第四天測境界標より海岸に至る五十度緯線に準じ開堀せし溝

是は将来の拓殖の進むに従て斯う云う中間の點にも標石を建てると云う必要が起ろうと思ひまして、**重**に山の上に基礎を置いたので、或度の合った眼鏡なら何處でも見える、そうして標識の點を見れば其處が即ち境界である云うことの見出し易い為に斯うしたのであります、尚ほ其他に於てこの邊は余り人の交通せぬ所であります、西海岸にピレオと云

う川があり、ここにピレオと云う村がありまして露西亜人が住んで居り、其邊の土民が漁をして往復して居る道でありまして、ここに標木を置きました。そう云う風に標識をして尚ほそれを連ねて、10mの幅に総て森林を切抜いて一も木の無い所が造ってあります。之が即ち林空であります。

境界は前申す如くこの山河を横ぎって50度の緯線に準じて劃定されました。この地方は前申します如く、道は無論無く、古来斧を入れたことの無い所であります、この中央平原の所、東の方の山から西の方の山までの間7里もありましようかこの間は全く水平の地であります。それからこの東西は非常な険峻なる山地であります、それで此平原は境界よりして凡そ12、3里行った所に、東の山と西の山とを連ねる川があります、ちょっと、ここは□と云う字を楷書で書いた様になって居る、この分水嶺から幌内川が流れて居る。この分水嶺から北に向かつてスインと云う川が流れて居ります、この川の下部は非常な緩斜面を有ってテルペニヤ湾に下ります、この川は非常なる緩なる流を有って居る川であります、従てこの川の左右は非常なる沼地で、沼地と云うと我々の觀念の沼と云うものは水田の如きもので、土と水と混じて居る泥深い所と解釈して居る、又外国の人も仏蘭西のマルカレー、独逸のツルペーとか云う字は矢張りそう云う沼である。然るに露西亜ではツンドラと称える一つの變った沼があります。沼地は水平地であるがここは若干の高低がある、1間や2間の高低がある段階のある沼地であります、それはどう云うものであるかと云うと、この下は数百年前から苔が溜って居る、この苔が中径1mくらいある大きな水苔であります、その苔が段々上へ上へと成長して而も下の方は朽ちて仕舞わないで残って居って、深さが1m以上ある、そう云う様に苔が密生して成長して、此の苔が毛細管引力によって水を吸収して恰も海綿のようであります、常時下の土に水を供給するから下の土がフワフワになって居るのみならず、矢張り此附近の道路が水を受けて柔らかいもので、斯う云う所へ馬などに乗って行くと、時々馬の両足が沼に這入って仕舞う、沼は斯う云うものであるから上は乾いて真青に苔が出て居ると云う有様である、そう云う工合な平原がある。

それから山に這入ると山の中に非常な大木が成長して、そうして日光があたらぬ為と同じく苔が生えて、深い所はツンドラと同じことで、馬の足が全く這入るとか、人間の膝まで這入ると云うような有様の所があります。そうして樹木は非常に密生して居って、中央貫線の道の西の方の山は総て榎松、蝦夷松の類が到る處非常に所繁茂して居ります。又中央平原の東の方は大体山には榎松、に落葉松を交えて非常な立派な大なる木が密生して居ります、木も大小種々ありますが、大なるのは中径が3尺及至3尺5寸くらい小さいのは1尺及至1尺5寸くらいのが多うございます、そう云う非常な立派な木で、而もあの地方の木は、非常な真直ぐなもので、まるで竹藪の如く木が生えて居る、真直ぐな木が密生して如何にも能く成長して居ります、其中多少は細いのもありますが、沢山生えて非常な密林であるから、其中に小さなものが出来ても曾て日光に會うことが出来ぬと云う有様である、木も速く日光を迎えたい意思がある如く、非常に速く成長する様で、それで細い木も非常に長く真直ぐになって居る、先ず彼處の木は大きなのは40mくらい即ち20間くらい真直ぐに

出て居る、細いのも矢張り 40m くらい上に出て居る、そうやって上の方が速く日光にあたると云う風に見えて居ります。兎に角そう云う風に非常な密度で、この辺の高い所に行きますと白楊、樺が多うございます、柳の類も多少生えて居ります、これが展望を遮ります樺の如きも高くはないが無論展望を遮るので何れも伐採せねば一も測量は出来ませぬ。又木を伐ったり種々の仕事をする人が持って行く糧食等を運ぶにも道がありませぬから道を造らなければなりませぬ従て非常な困難を尽くして居る、甚しいのは 54 度くらいの傾斜の所がある、54 度と云うと自然に斯う云う所から砂を流して出来る所の斜面以上の傾斜でありますから、殆ど木に登る様に手と足を働かせなければ登ることが出来ない。そんな處は物を運ぶことが出来ないから道を開けんければならぬと云うことで、非常に困難しましたのです。



第三天測點に於ける境界標石南面（第四編二〇四頁參照）

天文測量で定めた所は、天測境界點と申して標石がございませぬ、地下に掘込んであつて、地表面から下迄が 2m 餘でありますから 8 尺も這入つて居ります、此地下はペトンで真四角に幾層も中へ造り込んでありますが、此深さが今申す 2m 餘掘り込んであつて、其一番下に一つのペトン層を置いて其上に石を置いてあります。ペトン層面に十字が切つてありましてここが 50 度の緯線の通過する點であります、斯う云う風に漆喰土臺の中へ嵌込んで、是

に土を入れ、敲いて其上に漆喰をやる、餘り石が小そうございますからペトンをやつて其上に立ててあります、即ち其土が日本に向いた方は「大日本帝國境界」それから露西亜に向いた方即ち北面は「ロシヤブルチヤ」即ち露國國境と云うと書いてある、是は露西亜帝



第三天測點に於ける境界標石北面（第四編二〇四頁参照）

室の二つ頭の鷲の附いた紋、そして日本の方は我が皇室の御紋章を刻するの許可を得て之を高彫りにしてあります、（挿画参照）其横の方は天文測量をやつたのであるから「天第1号明治39年」向うは「アストロー」と云う標が附いて居ります、これが4個處に置いてあつて境界の基礎となつて居ります、それから中間の境界の標石は単に中間境界點と名けて前に申した山の上に置いた17個のものであります、それは1m少し餘即ち3尺4、5寸あるペトン層の上に簞込んで1號2號と番號が書いてあつて、日本に向いた方は第1號第2號乃至第17號とあり、露西亜に向いた方は唯一二と云う数字が書いてあります。それから黒い四角なのは人の往復しそうもない所ではありますが、日本に向うてやつたものでありますから、露西亜でもやつたので境界標が置いてある、裏は日本境界標、露西亜に向いた方は「ロシヤブルチヤ」として是は木で造つてある、固より数年間経てば腐蝕して仕舞うに相違ないが、元の目的はあの村に若干居る者が此境界が出来たが、どれが境界が彼等文盲

の者には分りませぬ、ここに来て見ると一面に山をズッと伐ってあるのが見えるけれども、却て平原の所は木の少い為は何處が境界が分らぬから、一時柱でも建って置いたならば、此處が境界だと云う習慣が付くだらうからと云うことで、臨時に此處が境界だと云うことを布告する代りに建てたものであります（編者曰挿圖第 11 版國境線上各種記號は上述の各種境界標を示せるものなり）

境界はそう云う風にして出来て居りますが、此境界の形が今申す緯線の形をして居らぬのであります、是は地表面の緯度を定めるには正しい緯度と人が想像して居る所の即ち赤道よりして北極地に至る 90 度に亘り即ち正しく割ったと云うことを頭に書いて見て、其書いた如く之を地球表面に正しく割當てて、此處が 50 度である、此處が何度であると云うことを正しく写すのは餘程むづかしい事業で、一部測量をやつて天文に依つて定めると云うことは餘程むづかしいので、是は私が茲で細かに申上げる必要もありませんが、元々星を當てに地球の表面に度を写すので、今日の測量機械の測量上、1 秒即ち 30m 少し以上、15、6 間と云う差が星を觀て測量して其點を地表に写した結果に於て差があると云うことでは、殆ど天文家と言われぬそうであります、それは私の所へ參つて居つた天文家の話を私が請売りしたのであります、又今回露西亜と我国と一緒にやつて見ると如何にも 1 秒などと云うそんな大きな差は無論出ませぬ、こちらと向うの差を見ると誠に僅なものでありますからして、實際測り得た価値は酷い差は無からうと思う、測つた所は確であると思ひます。

元々天空に輝ける彼の星と地球との關係を定めるのは何であるかと云うと角度である、其角度を算用したるものは何であるかと云うと水準即ち水平であります、水平と云うことは他に何の關係も無ければ水平であるのでございますが、總て物は引力を有つて居る、引力も亦其物の性質に依り其物のマッスに依つて違ふと云うことで、今我々はこのコップの水を斯うやつて汲んで、この水が平だと心得る是は、我々の智力で斯う云う平な所であれば平だと見なければならぬ、若し山ででもあれば水が山の為に引かれて傾いて居ると云うこともあります、今一つは地下が如何になつて居ると云うことが分らない、ここに水準器を置いて、地下の一方が非常な密質であると云うことであると、この方に餘計引かれる、ここに出べき水泡がここに出る、こちらに水泡を寄せる為にこちらを上げる、これが水平だと思つて傾いて居る、之を星と見て 50 度に應ずる星ですから、そうすると斯く斯くに出て来なければならぬ、所がそうでないこゝう云うことから地表面の 50 度の點が事實 50 度であるか 49 度何ぼのものであるか、是は點檢のしようが無い、殊に亜米利加の先程申上げた境界は東の方にシューペリオルと云う大きな湖水が紐育の北の方にある、それから少し北に行った所にウーズと云う小さな湖水があります、それから起つてバンクーバーの灣の所まで一直線に加拿陀と合衆國の境界が出来て居る、あの距離が 30 度ばかり 800 英里ばかりありますが、其 800 英里の間に 41 ばかり天測點が定つて出来て居ります、是は丁度 1871 年から 74 年まで 4 年間かかりました、此地方は交通の便は宜し、温度も少々良好ですから終始働いて 4 年間掛つて 41 個の天測を行つて居る其 41 個の天測を行つた結果はどんなものか、調べてみましたが、甚しい斯う云う風な關係がある、山の關係でなしに地下の關係

から引張られて、非常に曲て種々な形をして居る、一番酷いのは 738 呎から違って居る。所が其當時から無論地下の感応、鉛直に影響する感応と云うことを知って居りましたから成るだけ故障の無い所を選んでやりましたが斯くの如くくいちがいを生じました、是は地下の感応と云うことに帰著して居る。其 41 から測った中で、彼處は山があったから寄ったと云う証明の出来るものは 3 分の 1 しかなくて、3 分の 2 は地下の構造の為の影響としか思われぬと云う説明がしてあります。

要するに天文の 50 度の緯線を正確に一弧形に定める積りでやったのが、そう云う風に定めて居らぬのであります、実際我々のやりましたのは、西岸から始めましたが、違いの出来るのは前以て知って居りますから、この天文で定めたものは、神聖侵すべからざるものときめました。神ならぬ我々が地下を掘ってその構造を見ることは、数多の費用と時日を要しますから出来ませぬ、亜米利加の境界を劃定した実験に依ると、唯地下の構造に依ったと見なければならぬと云う様な関係があるから如何なる変化があろうとも其以上の研究は、到底数理を以て推すことは出来ない。山があっても違います、例えば富士山の緯度を測るに、北で測ると南の緯度が出る、南で測ると北の緯度が出ると云うことを聞きましたが、そう云うものは仕様が無い、出たものを神聖なるものとし、之を動かさぬと云うことにして規約を定めて測量をやりました。それから東に及んで見ると東岸の第 1 天測點と其西の第 2 天測點との連絡線が、完全に弧形をなすべきのに 70m 突許り喰違いました。仍て止む得ず、喰い違いなりに繋ぎ付けて露西亜の方に入り込ませました、或は日本の方に出たとも言われる、併し他は皆大概正しい所にある様であります。この天測だけをやった時は分らなかったけれども、この天測點を段々繋いで行ったら、無論この間は数多の山脈があつて且つ樹木があつては分らぬから、これから伐って行って両方に合するかどうかと云うことを心配しましたが、東から来たのと西から来たのが終に喰違いました。この西方日本でやった方は好い工合に合うたから、そこでこの點が露西亜の方に寄って居ると云うことが分りましたけれども、それは動かさぬと云うことにしまして、其儘出来て居ります。詰り今言ふ様な理屈ですから天文で定めた點がどれが 50 度に合うて居る、どの點が 50 度に合うて居らぬと云うことは殆ど鑑定の付けようが無い、どれかに誤があるが、略々近いものだと見るよりほかに仕方が無い。それで若これを今日の数理のやり方でやれば、これだけのものを平均してそれを正しいと見るよりほかない、一部局に限られた作業として見るときは、これを平均したら正しいかと云うと、近かろうと云うに過ぎぬので、50 度に相応せぬと云うことがあります。のみならず若しこれを平均して置きますと、他日この境界が全く分らぬようになった時、探し出すに二重の手数をせんければならぬ、即ち斯う云うものを測ってそれから平均を出さんければならぬ、のみならずそう云う場合に、これが皆取れて仕舞うと何處にあつたか分らぬ、それを復 2 度目にやると 2 度目の境界は亦違ったものが出ると云うことが起こる、非常な複雑であつて、一旦無くすと前の境界は殆ど見出すことが出来ぬと云う有様でありますから、前の天文測量で定めたものを正確としまして、それを繋ぎ付けると云う風に約束して、あの線が出来たのであります。

それから之を実行しました概要を御話いたします。是は明治 38 年向うから通知がありまして、彼は全く軍人ばかりで組織すると云うことを申して参りました、當方では木を伐ったり物を運んだりすることは、寧ろ専門の杣夫とか人夫とか云う者が宜かろうと云う考で、それらを 500 人ばかり、それから天文測量の者、地形測量の者等を数多く連れて行きました。夫とで地形測量の者の頭となって一部分の測量を遺憾なく実行し得る者が 4 名ばかり、天文測量の方も一部分を擔任して十分測量の出来る者が 3 名ばかり、それから其助手たる者を各々 2 名ずつ連れて行かれるくらいの組織にして、地形で 3、4 班、天文は 2、3 班出来ると云うことにして行きました。然るに向の委員はすべて軍人でやる流儀で、将校が 5 名、天文測量の者が僅に 1 名、地形測量の者が 2 名と云うこととございました、そうして力の方は兵と馬で、即ち木を伐ったり、道を造ったり、測量の助手、運搬と云うものは、兵と馬でやることにしてありました。其後其組織の不便なことを感じましたから向うの委員を増させて我委員と同じにさせて、去年は雙方共同数の委員で仕事をしましたから大層都合が宜うございました。一去年は之を一口に言うと、向の方は木を伐り物を運ぶ力は日本より餘計で、其代り測量をやるとか天文をやるとか、技術的の人は少いと云う有様でありました、のみならず地形から申すと實際能く分らなかつたけれども、此地に来て私の感じたのは西の方は非常な陰阻な山の様に見えて、東の方は餘程大陸的の山の様な傾斜が緩の様に見える、それで向うの委員長と話をして、之を二つに分けて、西の方は日本が擔任し、東の方は露西亜が擔任しようとするので、大体そう云う区分をしました、尚ほ東の方はあの通り長いから日本の方で技術を補助しよう、向うの技術官を補助して天文地形等をやって、此仕事をなし遂げると云うことにしました。そうして同時にここで天文測量をやって、この天測點から東西に切つて出て、此両海岸の天測點を定めようとするので、天文測量に従事する者を出して、一昨年測量し始めました。然るに東方の海岸は非常に荒れる所であつて、屢々探検はやりましたが始終荒れ詰めて一寸とも船が著けられぬで、とうとう東の方の測量が出来なかつた、昨年漸くにして天文測量をやりました。それはここは船が著かぬと云うことであるから、西から陸行で東岸に出て来て測量しました、ここ等は道が無いから手が著けられぬ、山の中の道の無い所を伐つてやりました。それが為に天文測量に従事した者は、3 日ほど糧食が絶えて、幸いこの河に鮭が居るから其鮭を捕つて食料としたことがある。要するに中央平原の東の露西亜の作業は 70m 突ばかり違が生じました、幸に日本の方は兩天測點は 50 度の線に合つて居るので、其の間に僅か 1 間半ばかりの違で、この林空が 10m あるから何の苦痛も感ぜず少し広げただかりで出来上がったのであります。

是と同時に、今申した通り数多の測量班を有つて居りますから、海馬・海豹両島の測量をしました、ポーツマスの條約の精神は、こんな所の島を測量するのでなく、此境界の附近に島があつて、どちらに属するか分らぬからと云う精神の様に見えるが、この邊を探検しよう、條約が既に定めて居るから皆やろうではないかと云うことで、之に同意して探検しましたが、この附近に小さな岩があります、岩の上に松が生えて居て、ちょっと景色が

宜い、島と称するものはこの海馬島と海豹島との二つに過ぎませぬ、之を細かく測量して其明細書を作ると云うことは條約の上に規定がありますから、両国の委員が協同して内部の測量の片手間に測量したのであります、是等の書類は、此間交換をうけまして唯今政府へ出して仕舞って、何も御目に掛けるものはありませぬが、若干此處に書損の物があまして、書損と云っても何も違ったものでない、出来が汚いから露西亜の方で棄てたいと云うことで、反古にして書直しにしたものを持って来ましたから後に御目に掛けます。

境界劃定の副作業として、昨 40 年幌内川を通過しました、一昨年はこの地方は道がありませぬで、アレキサンドルフスキーに上陸し、これから 45 里許りの道を通って國境に達しました、それがため非常な時間と金とを使った、且つ露西亜の場所で金を使うことは、如何にも残念に思いましたから、昨年は到着早々探検をやりました、先ず船をやつて必要な物を後から取寄せると云う考えで探検をしましたが、可なり水深があつて 15、6 石の船は上つて来る、唯数百年來會て舟楫を通したことの無い川で、只土人が独木舟で往来したことがあるに過ぎない、所々径 1m-3 尺以上もある大木が縦横無盡に川の中に倒れて網の目の様に横つて居る、川幅も廣くなし、水深も浅いし而も水が其間を通る為に船が通じない



(照參頁六一二編四第) 路水の後破爆木流河イナロボ

と云う有様であります。之を去つて我船を通じさせるのは、僅か 1 年間の使用に過ぎないけれども、将来樺太の拓殖の上に一の大動脈たることを失わぬだろうと云うことで、之を開くことにしました。それは幸い戦争に使つた火薬の不用物の、處分に困つた物があつたから、それを持って行って、数多の地雷をやつて之を取除いて、今では全く境界まで 15、6

石の船が行くようになりました、此川は川口から境界までの里数が、日本の 70 里ばかりある、直径は 30 里足らずであります、非常に屈曲して流れて居る為に 70 里ばかりになります。其半分は 7、8 噸の小蒸気船が上ることが出来る、それから上は曳船で上がる、そうしますと曳船が 10 日ばかり小蒸気船が 2 日ばかり、12 日で行ける、下がる時は日本の船が漕いで下がって 2 日乃至 3 日ぐらいで川口まで行かれます。

先ず境界の話はそんなことで措きまして、樺太を屢々通過いたしましたから、其模様を申し上げます、元々境界の劃定と云うことが我々の仕事でありますから、我々の眼中他のことは何も置かず、頭に何も考えず、外の物に気を付けて居ない、唯通過して見た所の有様を一寸御話しいたしましょう。

樺太は全面積が 4500 方里ばかりありまして、50 度以南が 2100 方里、50 度以北が 2400 方里（編者曰第 1 編の面積と異れり蓋し両者とも詳密なる測量なきため合致せざるなり）九州の 2300 方里より少し小さくあります。此樺太は 3 郡に分って居りまして、アレキサンドル郡ツイモフ郡コルサコフ郡と云って居る。ツイモフとコルサコフは、殆ど日本のものになって、アレキサンドルは一部分日本に這入って居る、古来この地方は 55 ケ村ばかり小さな村が散在して居って、戦争前には土民がアイヌとかトングスとか、オルトンとか、支那の韃靼附近に住んだ人民が混入して居る、それが 4000 ばかり、それから露西亜人がこの間に 35000 ばかりも這入って居ったのであります。所が露西亜の人民と云うのは、あの樺太と千島と交換せぬ前から既に 1858 年頃から段々重罪者を送り居って、交換後全く重罪者を放った為に、今は 35000 の人民の中で、軍隊若干と役人若干を除いた外は重罪囚である、だから強制的に此處に寄越された者であります、それから罪餘全く罪人の名を取消さずに、詰り罪状が軽くなる様な理窟で土着することを許して、土地を遣ったり家屋を遣ったり、年々補助金を遣ったりして、之を開かせて、自由民となるまで、数多の階級を経てやって居りました、其の 35000 人の住民は、元より強制的に自分の意思に反して寄越されたのでありますから、戦争の時に我軍に於て、其本國に帰りたい者は還して遣る方針を執りました為に、大概帰った、其後露西亜の方でも無論自由民となって、即ち罪人たる懲役の期の満ちた者は還すようになりましたから大部分歸った、今日は 4000 ばかり即ち戦争の前より 10 分の 1 くらいしか残って居りませぬ。兵隊は元は沢山居った、殊に巡查の代わりをして居りましたが、是も今は減って僅か 4、500 人くらいしか居りませぬ、それが、アレキサンドルフスキーと其附近に若干居るだけで巡查などは至って少い。元、此處は収入も無い、租税の義務も無ければ人民は政府へ金を納めることが無くして、唯政府が人民に金を遣って保護して居ったと云う有様で、其他総て交通が不十分であって、土地が能く發達すると云う訳にはいかない。巡查も政府が金の拂えぬ為に遣らぬのか、要するに巡查の如きもアレキサンドルフスキーまで 45 里ばかり四十何ぼと云う村に、一人居る所があり居らぬ所がある。其の村々の人民はどんな者かと云うと、皆人殺しをしたとか放火したとか亂暴な者が多いので、十分な取締が出来ない戦争の時に歸ったのはどう云うものかと云うと、永く此處に在って財産が出来て相應に柔なしくなった者で、あとに残ったのは財産が無くて家

に歸った所が飯が食えぬと云う様な者のみです。一口に言えば善い者が歸って悪い者が残った、そうして取締が不十分であるから盜賊横行の有様で、晝も大道を一人で通行することは非常な危険で、私の居る内には屢々人殺しがあった有様で、私が此處を通過する時は、向うから護衛兵を付けて、尚ほ通過する沿道に兵隊を配置して呉れる有様でありました。現に餘程困って居ると云う状態は、私が通過する道は45里もあって、而も道が悪いために4日も5日も泊って行かんければならぬ、泊る所は村の村長の家で、政府から地方官に言つて、郡長が私に附いて居つて村長の家泊る、所が彼處の制度が村長以下は罪人、人殺しなどの改心した者が地方の選挙でなつて居るので、それで其村長の家泊つて聞いてみると、矢張り人を殺したり、火を放つたり種々なことをやつた者で、それが改心して、今は妻子あり身分ある者である、それ等に聞くと、私共はどうか速く歸りたい、何分生命財産が危険で困ると言うて居る。元々人の生命財産を自在にした者が、今は生命財産が危険で困ると自分で言う有様であるから、以て危険の程度を推測することが出来る。餘程大打撃を受けて非常に今は壊れて居る状態であります、それに反して、日本に取つた方は匪徒が居りませぬ、この川口からピルカと云う所がありますが、其以南は取つた時分に数千の露西亞人が残つて居りましたが、段々立去つて一昨年暮には500人くらい居りました。それは成るべく我国でも、性質の宜くない人種なのだから還したいと云うので、還す方針を執つたけれども、我が政令の下に生活するのは、頗る安全であるから歸る必要は無いと云つて、土著に決した者が3、400人ある様子であります、現に我々境界劃定に参つた者がこの西岸で能く逢いました。

ここでコピーは終わっている。引用するにあつて出来るだけ原文に近い漢字を使ったが、ひらがなの使い方などは現代文に合わせた。日本ではそれまで陸上に国境がなかつたし、太平洋戦争でこれらの地を失つた後も陸地が国境になつたことは無いから、日本の歴史上、唯一の国境劃定作業であり、これに天文学者が駆り出されたのであつた。